



## 漁村の性格と教育的課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 英吉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00000071">https://doi.org/10.32150/00000071</a>

## 漁村の性格と教育的課題

佐 藤 英 吉

北海道学藝大学函館分校教育学研究室

Eikichi SATO: The Nature of Fishing Village and Educational Problems.

## 目 次

- |                                     |                            |
|-------------------------------------|----------------------------|
| 1. 序<br>2. 漁村の基本的性格<br>3. 漁村の社会構造と教 | 育的機能<br>4. 漁村の分化と教育的<br>課題 |
|-------------------------------------|----------------------------|

## I

教育社会学の任務に関する敘述は之迄に多くの教育社会学者によつて試みられている。今それらを要約するならば凡そ次の二つにまとめられるであろう。即ち

第一は、社会的諸集團—学校集團をも含めた一の構造及びそこに於て行われる教育的機能を分析して、それと学校教育との相互関係を研究するものであり。

第二は、特に学校内部に行われる教育活動の社会的諸側面を研究することである。従つてこの場合教育の目的教育課程、教育指導及び教育行政等の諸問題を社会的立場から規定することが主要な関心となる。

従来も、教育を社会的立場から把握しようとする試みは多くなされていた。然し現代に於ける教育社会学は、その社会的基底を科学的方法によつて探究し、教育活動に基礎を與えようとしており、且つその研究対象が特殊な領域に向ふことによつて教育社会学の内容を確立しようとしているところに特色があると云われている。

教育社会学の学問的領域については、社会学及び教育学の立場から夫々の主張がなされているのであるが、今之に関する詳述はこゝでは許されない。然し教育社会学の成立が多く教育学自体の内容的拡大、深化及び社会に於ける教育的現実の必要に依つて促がされたものであることは誰もが認めなければならないであろう。今日の教育社会学の関心が主として、教育的現実の実態を調査し、そこに於ける人間形成の過程や社会的必要 social needs を明かにして、教育の実践活動を指導しようとするところにあるのも、それをうなずかせるものがあると思う。

然も、最近に於ける研究の著しい傾向は「社会的背景 community backgrounds を一層徹底的に研究しようとする方向」(1)に向けられているようである。

教育の背景としての地域社会は種々の角度から分類することが出来るであろうが一般には、人間形成に基本的な影響を與え、又学校地域の単位とも考えられる都市社会 urban community 及び農村社会 rural community と云ふ系列が最も廣く認められている。私は、かゝる系列に属する community としての漁村 Fishing village を此處で考察して見たいと思う。

漁村教育に就いての研究は従来ほとんどなされていないと云つてよい。社会学的研究も極めて少なく國外の文献も寡聞にして見たことがない。その理由が何に依るものかはしばらくおくとしても我が國の実態から考えその研究が極めて重要なことは当然であろう。

我が國に於いて、漁村の社会学的研究を困難にしている理由の一つは、漁村はその種類が極めて複雑で、然も種々の特質をもつ部落、村が地域的に入り交つていることが多いということである。之は漁村構造が業態に密接に関連して居り然もその業態が自然的條件、経済的變遷に影響されて變化に富んでいる爲である。その二は、漁村社会形態の變化が又複雑であり、且つ激しい爲め史的考察をなす場合に不明の点が非常に多いということである。即ち、漁業に於ける経済的條件は、都市や農村に比べて浮動で然もその變化が漁村自体の構造をも變えることが少くない。従つてその漁村の特性を分析しようとする場合旧漁村以來引き継がれている特殊性や傳統、慣習等と現在の社会的條件とを判別することの困難な場合が

多いのである。その三は、海上の事象は陸上の事象のように社会現象の痕跡を我々に残して呉れないことである。海上は漁業に於ける生産の場所であり、漁村に於いては最も重要な村の一部である。然しそこはいかに努力を投下しても變ることのない自然のままの海なのである。なほ海上は業態や漁村成立の基本的条件であり乍ら、陸上で行う研究とは違つて、継続的な研究を困難にしているということである。(2)

以上の三つの諸条件は漁村教育の社会学的研究の場合にも附随している条件でもある。

註 (1) L. A. Cook: Community Backgrounds of Education, 1938 p 13

Cook は教育社会学の研究に於いて (1) 社会生活の諸型式の分析調査 (2) 社会環境の人間形に及ぼす影響力 (3) 社会と教師、学校との関係、の三つの問題を強調している。

註 (2) 櫻田勝徳; 漁村、社会学大系Ⅱ

漁村を教育社会的に考察しようとする場合、その主要な課題は、漁村社会の構造及び機能を分析、記述することであるが、その前に、漁村社会の固有の性質即ち、他の地域社会と最も明かに区別される基本的性格について先ず考察し、次に漁村の定義について一應考えて見たいと思う。

第一に、漁村は陸上に於ける聚落のみでなく、それと全く異質的な海上——時には湖沼河川漁業も考えられるがそれは極めて少ない故に以後海上の漁業のみにする——をも含めた地域社会であるということである。此の場合海上は生産の場であり、陸上は主として生活の場と考えることが出来るであろう。此の事は漁村社会の構造及び漁業組織の面に極めて特異な性質を興えている。之迄は一般に、漁村が農村に近似した社会集團としてその行政的、教育的問題が、農漁村の問題という風に一括して取り扱われていたが之は未だ漁村の特殊な性格がはつきり理解されていないことを示すものであろう。漁村に於ける教育は農村の教育にくらべて、全くその性格を異にする社会的基底の上に成り立つているものなのである。

農村はまず村というものがあり、それと農業という業態に結びつけることによつてわれわれはほゞその性格を理解することが出来るが、然し漁村は村と漁業を結合し、又は「漁業を全休とする村」と定義するだけでは、漁村としての特質を理解することは出来ない。それは漁業の持つ特異性が漁村の構造、機能の性格を特殊なものにしているからである。

農村は生産の場即ち、労働する場所と、生活の場、即

ち、居所とは共に同質的な陸上にあり、多くの場合地域的にも一致しており、原則的には両者が直接に隣り合つている。かかる条件は、漁業の組織に比べて、農業を極めて個立的な業態にさせることをも可能にし、家族単位の組織を永續せしめている根本的性格であると思う。

かくて漁村というものを廣い意味に考えれば、漁村は陸上にだけあるのではなく、極めて重要な一部分が海上にあると云えよう。

このように、生活面と生産面とが分離し然も異質的であるということは漁村の形態を分析し理解しようとする場合重要な基本的性格である。

次に、漁村の基本的性格として考えられるのは、漁村は経営協同体的聚落であるということである。漁村が小都市的であると考えられるのはかかる基本的性格に由来する。之は、漁村が生活の場と生産の場が質的にも地域的にも分離していることによつて「家」が直接に隣接し形態上密集した部落を形成していること、又漁業組織が協同によることが多く、然も地域的に近接していることが出漁の際都合が良いという業態的理由、及び漁港や漁獲物の陸揚げ、処理等の中心的な場所に集中することがよぎなくされていること等の諸理由に依るものであろう。従つて漁村は、相接した家々の部落と海上を中心とした漁場とが結合して一つの漁村構成の単位となつている。之が農村の場合では、家が夫々の周囲に田畑を持つていて之が一つの農村構成の単位となり、かかる単位が集團となつて部落を形成しているのである。

それ故に漁村は嚴密な意味からすれば「村」というよりは町の形態をとる。所謂「漁師町」なのである。かかる点から漁村は農村に近いというよりは小都市に近いと言つてよいであろう。

次に漁村の定義について考察したいと思う。クツクはコミュニテを定義するに必要な要件として凡そ二つのことをあげている。即ち、そのコミュニテは一地域の住民を包含し、然もその住民が共通の経験によつて統一されていること次に特定の方法で機能を現わす活動組織体でなければならないと云つている。(1)

漁村社会も当然かかる条件を持つものでなければならないであろう。漁村は先ず「漁業従業者及び之等の人々の漁業に直接間接に關係して生活を維持して行く人々をも含む地域集團」(2)でなければならない。然しこゝでその地域とは海上を含めたものか、どうか問題になつて來るのであるが、少しそのことについて考察を進めてみよう。漁業者は陸上の一定の地域に居住すると共に、その生産活動の最も主要なる部分は海上に於て行われる。尤も此の水域は、陸地との地続きであるところの所謂「地

先の海」の場合と、此の地先の海を超えた「沖合」を主な生産場所とする場合とが考えられるが、かゝる海の自然的條件は、その地上の地域社会の成立条件と密接な関連性があり、又その漁船の構造及びその漁業組織に於ても夫々異つた特質を與えるものである。前者は主として沿岸漁業及び定置漁業を発達させ、後者は沖合漁業の形態をとる。沿岸漁業村の場合は陸と海とを包括した生活地域としての漁村を明瞭に見ることが出来るのであるが、沖合漁業村の場合その漁業水域をも地域社会に含めてよいかどうかはかなり疑問の存するところであろうが機能的関連の緊密さの程度によつてはそれを含またいと思ふ。

次に漁村は、漁村に居住する人々の生活組織として、統一的な地域社会であると共に「漁業の特殊性に適應した職能的な組織としての社会構造を持つものである」(3)ことは当然であろう。そこに於ける漁業組織は、時に村全体の漁業者を以て構成されることもあり、又その村を細分する地域的な漁家集團を以て構成されることもある。いずれにせよ地域的統一体であると云えるであろう。殊に若者組の組織はその土地の紀風を基盤とした集團であつて地方的團結意識の強固なものであつた。かくて「漁村とは、漁業の特殊性に適應した職能的社会構造を持つ地域社会である」(4)と一應定義することが出来ると思ふ。

註(1) L. A. Cook: Community Backgrounds of Education 1938, p. 28

註(2) 櫻田勝徳: 漁村、社会学大学Ⅱ

註(3,4) 同上: 同上

### Ⅲ

さて、前節に述べたような特質を持つ漁村社会は、その構造にもとづいて種々の機能を含んでいる。

もともと地域社会は一般社会生活を含むばかりでなく、自らの中に、家族、近隣、学校、職業等の基本的な集團や政治、経済、宗教の如き文化的集團をその中に、包括的に持つ統一体である。地域社会は之等の集團が累層している集團であると云えよう。即ち、漁村は、部分的諸集團を構成単位とする地域社会である。

一般に人間は地域社会の生活に於て、具体的な生活を展開し、又部分集團は、地域社会の中にのみ運営されているものである。従つて集團の人間形成過程は、夫々の性格を持つコミュニティーとの関係を基盤として考察されなければならない。即ち人間は部分集團のいずれかに所属し、その集團構造に於いて形成されつゝ、然もその基盤としての地域社会が持つ社会力の影響を受けているのである。

かくて、漁村の教育的機能を明かにしようとするなら

ば、漁村社会を構成する部分集團の機能について考察し、それと人間形成との関係についてもとりあげるべきであろう。然し、此の場合、私は先ず、漁村社会の基本的性格に由来する構造とその教育的機能について考察したいと思ふ。

漁村の社会形態は、漁業に密接に関連している。漁村の形態は、漁業そのものの性格によつて規定されていると云い得るであろう。即ち現在の漁業界に、極めて多様な形態を見ることが出来ると共に、一つの漁村について見ても、そこに於ける漁業の變遷によつてかなり大きな變化をしているように思われる。

漁村はその漁場である海の自然的條件によつて一般に次の様に分類することが出来るであろう。

(1) 漁村に地域的に接続した一定の地先の海を主な生産場所とするもので、こゝろいう村では主として、小鈎採藻、養殖、定置漁業が行われる(沿岸漁業村)

(2) 以上の地先の海を超えた沖合の海を主な漁場としているもの(沖合漁業村)とである。(1)

明治34年頃の漁村の大部分が沿岸漁業村で、沖合い漁業村は極めて少なかつたが、漸次沖合い漁業に變化移行するのが多くなつてきている。かゝる傾向を著しく促進させる契機となつたのは動力の移入によるものである。

今、漁村を行政的意味に於て、その地域社会の職業構成の実態の立場から、漁村の型を見るならば、(1)純漁村、(2)半漁半農村、(3)養殖地、の三種類に區別することが出来る。我が國では純漁村というものは割合に少く、半漁半農村という場合がむしろ多い。そして同じ半漁半農村でも、(1)その漁村が漁業部落と農業部落とが結合されている場合。(2)漁村の中に漁家と農家とが包括されて成り立っている場合。(3)は同一人、或は同一家族が漁業しながら然も農業をも営むという場合が考えられるであろう。半漁半農村は、沿岸漁業村に多く、一般には漁村としてあまり発展性の見られないものが多い。何故ならば背後に平地を持つということは、地先の海が砂浜で屈曲に乏しく船着場の條件にも不利だからである。

さて以上に漁村の形態を簡単に概括したが次に漁業の組織について考えて見よう。

始めに、地先の海を重要な漁場としていた所謂沿岸漁業村では、主に小漁具による自由採取か採取日を決めてする共同採取かによつていたが、特に主要な漁業は大網漁業(定置漁業)であつた。之は季節的に地先の海に群來する魚を村人が大勢協力して行う網漁業であつて、沿岸漁業では最も漁獲高の大きいものであり、漁業の組

織、及び漁村の構成にも重要な意義を持つものである。

大網漁業はその漁業の性格から居住地を共にするという事は不可欠の條件である。一旦魚が群來する時には、協同的魚獲する方が都合が良く、その爲には居住地が隣接して居ることが極めて自然的であつたのである。此の漁業組織は時として一村全体の人々によつて構成されるか、又は更に細分された地域的な漁家集團を以て構成されるのが原則である。その組織を統一する力となつたものは、或る場合は、村内の親方格である網主か、又は経営者が中心をなしているが、時には平等の立場にある漁家集團の組織によつて行われていることも少くない。

一般に漁業組織が一定の地域集團によつて構成される場合は、世襲的に固定し勝ちな漁家を構成単位とする組織になる傾向がある。(2)従つて沿岸漁業が、屢々數個の血縁若しくは同族的な集團によつて組織されたり又は親方というものを中心として親方子方關係が構成される。然し一旦村内の大親方、或は網主が没落すると村内の人々が平等の立場から協同經營の組織がつけられることも少くない。(3)之は、漁獲物はその村の共同の恵み物であるという觀念や、村に接続する一定地域の海を公平に運用してゆく爲とか、又漁業労働の責任を平等に分ち合うという立場から組織されるものである。従つて沿岸漁業村の漁業組織には二つの型が見られる。その一は、親方、子方又は血縁的な結合による垂直的な型と、その二は、対等の権利の立場で、機能的に結合したもの、所謂水平的な型である。之は組合組織の性格を持つものである。

沿岸漁業村の組織に於て教育的な機能をいとなむ組織としては「若者組」がある。之は漁村内部の地域的な青壯年者(普通15才~41, 2才迄が含まれる)によつて組織されるもので、年令長幼の序列に基いた統制的な組織である。大抵の場合漁業に対する熟練の度合が年令に相應していたので、この組織は漁場に於ける種々の作業配置に合致していたということが出来る。即ちその組織が村の生産組織にそのまま結合することが出来たのである。こうした組織が、村の親方、網主を中心とする漁業組織であるならば、若者達はその使用人であるに過ぎず、若しその地域の漁家が共同經營の組織である場合は、若者組は自ら自治的組織体となることが出来るのである。

要するに沿岸漁業村は地域的な漁業組織体であり、それは漁家相互が緊密に結合された生活共同体であつて、沿岸漁業村の構造は地域的生活共同体とも云えるであろう。

次に沖合漁業について考えて見よう。沖合漁業の進出の無動力漁業から動力漁業への過程に即應して次第に規

模が大きくなり、且つその形態も分化して來た。即ち、第一に漁民層の分解である。沖合漁業の特質、即ち航海の延長、漁場に於ける競争ということによつて船体、設備、動力の如き資本的諸要素が極めて重要になり、船主、経営者の位置が重要になつて來たこと、実に、船体が増大して來たことによつて、時には50~100人という多数の漁夫を必要とするものが多くなり、その中でも生産條件として海に経験の深い漁夫の地位も亦高いものになつて來た。こゝに幹部漁夫が次第に一般漁夫との間に一つの階層を生ずるようになって來たことである。即ち沖合漁業の人的構成は経営者、幹部、漁夫、一般漁夫に分れ、そこに職能的構造を生み出すようになった。かくて従來の自家小生産階層としての漁民層の間に漁業労働者を折出すようになり、職能的階層がそのまま社会階層を構成して漁村の階層的構造が醸成されるようになった。(5)かゝる漁業労働者は他漁村より流入することもあるが、同時に他漁村でも季節的に流動するものも居た。之が所謂流動漁民である。(6)

第二にマニユファクチャー的漁業に於ける生産過程の分化である。之は漁獲物に対する加工、製造の工業化を意味する。こゝに漁獲、製造、市場という業態の分化に應じて技術的分化が生ずる。こゝに従來の單純な漁業形態から高度の工業的生産過程への推移を見ることが出来る。(7)

第三に、沖合漁業は船入り場と漁獲物揚陸場を必要とする。即ち漁港の設置が重要な問題となつて來る。漁港の成立はマニユファクチャー的漁業發達の基因となると共に市場形成の基礎的過程である。然し乍ら、その場合、マニユ的漁業の發達が、夫れ自体を基軸として、そこに産業的中心地を形成するか、又は既存の市場に依存する所謂都市圏の部分的構成体となるかは、その漁村社会構造の面にも極めて重要な問題を投ずるであろう。

かくて、漁村社会が分化することによつて従來重積的な集團構造が機能的集團構造に分化していく傾向が理解されるであろう。(8)

註(1) 櫻田勝徳：漁村、社会学大系 p 169

註(2,3) 同上 p 179~180

註(4) 柳田國男編：海村生活の研究 p 205~232

註(5) 清水弘、小沼勇：日本漁業經濟發達史序説 p 85~123

註(6) 櫻田勝徳：漁村、社会学大系 p 190

註(7) 清水弘、小沼勇：日本漁業經濟發達史序説 p 173~203

註(8) Sorokin & others: Source Book Vol. 1

これについては鈴木栄太郎氏解説を参照とした。

## IV

さて近代に於ける漁村の傾向を総括的にまとめ、そこに要求されている教育的課題を述べたいと思う。

オルゼンは近代社会の特色を、工業生産の増大、都市化、及び社会の相互依存性であるとし、かかる近代社会生活の様相は学校の目的及び計画の上に深い影響を興え、又教育哲学の上にも直接経験、社会的現実主義の傾向を益々発展させた。(1)と述べている。

漁村も又他の地域社会と相互的に関連しつつ、歴史的に発展している。それは漁村自体の内部的矛盾と外部的諸影響によつて発展するものなのである。漁村の變化は緩慢ではあるが然し近代社会の指向するところから孤立ではあり得ない。次に漁村の近代的傾向の顯著なるものを指摘して見るならば、

第一は、新興商工業者達の水産投資が顯著になり、更に彼等自身、自ら漁業を經營しようとする傾向が強く認められることである。(2)此の場合投資者が、その地域内の者であるか又は他の地域の者であるかによつて、その漁村全体に興える影響はかなり違つたものになるであろう。經營者が他の地域の者である場合、従來からのその漁村社会の階層的秩序が崩壊し、地域的統制力が喪失して行くことが充分予想される。かかる旧秩序の動搖は漁民の心理的、共属意識方面にも深刻な影響を興えるものなのである。更に、外部地域の漁業労働者が流入して來る場合更に組合組織、及び社会關係の變動が考えられ、漁村組織、漁民感情にも微妙な影響を興えるであろう。

第二は、現代の漁村はマニユファクチャー的段階にあるということである。即ち資本制生産の發展の過渡期であつて、それは産業資本の確立の方向、近代労働者生成の方向、機械生産体系の方向と、此の三者の未成熟な段階として特色づけられる。(3)かかる傾向は必然的に漁業者の高度の工業生産及び複雑な經濟關係の適

應を要求するであろう。

第三は、漁村社会の都市化的傾向である。沖合出漁による經營規模の増大とマニユ的漁業形態の發達とは揚陸地及び大漁港發達の基礎的要因となるものであるということは前にも触れたが、之によつて、沿岸に分散していた、漁獲物が漁港に集中し、然も漁港そのものが大都市周辺に移動し、此處に大都市圏の拡大現象が生じる。(4)従つてそこでは漁村社会の新しい相が構成されるであろう。それは、漁村と大都市との間の頻繁化する交通と、生活圏の拡大とを意味するものである。

以上の社会的發展は、従來の單純な手工業的漁業技術から工業生産技術へ、地域的生活協同体から、多種多様な分化集團への参加、及び近代的社会生活への適應ということが、今後の漁村教育計画、教育目的設定の社会的基礎として要求されるであろう。

教育制度は諸社会力によつて構成されるものである。然し單にそれに受動的に追隨していくことによつて、その社会的様相を反映した教育の編成が結果するというのではなくして、その社会力を能動的に統制し、そこから人間形成と社会の發展の爲の教育が計画され実施されなければならない。

この様に社会力を能動的に合理的に操作しようとする場合、その社会人は何等かの社会的知——社会連帯性の意識——及び社会科学的認識が必要とされるであろう。

漁村教育もかかる一般的原理から例外ではない。然し現実の社会的基底を深く分析し探究することによつてのみ漁村としてのより具体的な教育が可能になるのである。

註(1) E. G. Olsen: Community and School, Encyclopedia of Modern Education 1943

註(2) 櫻田勝徳: 漁村、社会学大系Ⅱ p 202, 203

註(3) 清水弘、小沼勇: 日本漁業經濟發達史序説 p 137~203

註(4) 同上 p 245~251